

防衛大学校本科第9期学生及び理工学研究科第2期学生 卒業式における学校長式辞（昭和40年3月20日）

本日、本科第9期学生及び研究科第2期学生の卒業式を挙行いたしましたところ、佐藤内閣総理大臣^{注(1)}、船田衆議院議長^{注(2)}、小泉防衛庁長官^{注(3)}、赤城農林大臣^{注(4)}をはじめ、内外多数の来賓各位ならびに卒業生の父兄諸氏のご臨席をいただきましたことは、卒業生はもとより、われわれ一同の無上の光栄でありまして、ここに職員、学生を代表いたしまして厚くお礼申し上げる次第であります。

さて、卒業生諸君、本科の諸君は、去る昭和36年4月本校に入校されてから満4年、幹部自衛官として必要な一般教養及び理工学専門分野における勉学に、はたまた体力・気力の錬磨に精進せられ、広き視野を開き、科学的な思考力を養い、豊かな人間性を培ってこられました。また、研究科学生諸君は、2ヵ年間にわたり理工学の専門科目を履修せられました。

いずれの諸君も、いまや立派にその業を終え、住みなれたこの小原台上を去り行かんとしております。私は、諸君のあふれるような喜びと感激とを思い、諸君を本校におくられた本日ご列席の父兄各位のご満足を考えながら、ここに諸君の多年の努力に対し敬意を表するとともに、輝かしい前途に対し、心からの祝福を贈らんとするものであります。

諸君は、その全期間を通じ榎前学校長のご薫陶を受けられたのであります。榎先生は開校以来12年有余、あらゆる困難を克服して、本日の防衛大学校の基礎を開き、爾来約3600人の卒業生を育成せられたの



第2代学校長 大森 寛

注(1) 佐藤 榮作

注(2) 船田 なか 中

注(3) 小泉 純也

注(4) 赤城 宗徳

でありまして、そのご功績は誠に偉大なるものがあります。諸君の今日あるは、いつにかかって高潔たるご人格、該博なるご識見の持ち主である同先生の精根をかたむけての教育のたまものであると信ずるのでありまして、私は先ず卒業学生一同とともに、榎先生の多年にわたるご功績をたたえ、ご労苦に対し満腔の謝意を表したいと存じます。

本科卒業学生諸君は、ただいま、陸・海・空各幕僚長から幹部候補生の任命を受け自衛官になられたのであり、近く、それぞれの幹部候補生学校へ赴任せんとしております。諸君の門出にあたり、いささか饒^{はなむけ}の言葉を贈りたいと思います。

第1に、諸君は、幹部自衛官たらんと自ら志願して本校に入学せられたのであります。諸君に対する期待は、諸君が立派な自衛官となり、わが国防の担い手としての役割を果されんとするところにあるのであります。

いやしくも、独立の国家がその国民の手によって自らを防衛すべきは当然であります。わが国においては、いまだ一部に戦後の過渡的風潮の存続している事実を否定し得ないのであります。今こころみに、昨年卒業した第8期生について調査した結果を見ると、将来自衛官になることを決意して志願した者は32.5パーセント、入校前後に決意したものは9パーセントであり、残り60パーセントは深く考えずに入校したという結果になっているのであります。これらの事実は、現下社会における国防意識の実体を反映しているものと申すも過言ではないと考えます。しかし、本校における教育補導の結果、第8期生は卒業までに全員立派に決意をかためているのであります。

私は、本日の卒業生の全員が、その生涯をわが国防に挺身せんと決意しているものと信じて疑わないのであり、これが、今後諸君の進むべき道であり、国民のひとしく諸君に期待しているところであります。

今日の世相においては、諸君の前途は決して容易なものではありません。しかし諸君の任務は、わが国の将来にとってきわめて重要であり、男子としてやり甲斐のある職責であります。諸君は本校において、履修せられた基礎的な素養の上にさらに今後勉学・修養をつまめると同時に、自衛官としての使命をいよいよ堅持して、わが国防の中核的役割を果されんことを切望するものであります。

次に申し述べたいことは、諸君は新しい時代、民主主義時代における自衛官としての心構えをしっかりと身につけてもらいたいということであります。新しい時代に対処するためには、新しい心構えを要するは申す

までもありません。民主主義時代においてもっとも重要なことは、常に国民と共にあるということであり、国民から離れた国防はあり得ないのであります。

これについて思い出すのは、アメリカ・ワシントンにあるアーリントン記念館のドームに刻んである次の文字であります。それにはこう記しるされてあります。

WHEN WE ASSUMED THE SOLDIER
WE DID NOT LAY ASIDE THE CITIZEN

意識いたしますと「われわれは軍人である。しかし市民であることをやめたのではない」ということであろうと思います。この言葉はジョージ・ワシントン^{注(5)}が独立戦争の際、議会から大陸軍司令官に任命する旨の通知を受けたとき、これに対する返答として1775年、すなわち、独立の前年の6月25日、ニューヨークから送った自己の所信を述べた手紙の一節であります。われわれは軍人であるから軍人としての職分には最善を尽さなければならない。しかし、軍人になったからといって、市民としてのよき生活態度、市民としての良識を失ってよいということではない。軍人たらんとするの余り、常軌を逸した戦うためだけの人間になってはならない。立派な軍人であると同時によき市民でなければならない、ということであると思います。これは非常に重要な意義を持っているものと考えます。

われわれにとっては、「われわれは自衛隊員である。しかし市民であることをやめたのではない」と置きかえるべきであります。

今後万一にも戦争が勃発するようなことがあれば、それは人類の滅亡にも発展しかねないのであります。国防の任務にたずさわる者の責任はきわめて重大であります。われわれは、人類の最大念願たる平和の理想の追求において決して人後に落ちてはならない。常に人間として正しいものの考え方、謙虚な心構えを養わなければならないのでありまして、このジョージ・ワシントンの言葉は、自衛官として諸君の終世忘るべからざる教訓であると考えるのであります。

本日の卒業式にあたり、来賓ならびに父兄各位に対し、重ねて謝意を表するとともに、平素何かとご支援をいただいております内局、統幕、

注(5) 初代アメリカ合衆国大統領

陸・海・空の自衛隊関係者に対して厚くお礼を申し上げて、私の式辞といたします。